

●サグラダ・ファミリアを活用した街づくりを視察して

団員 吉富 健一

バルセロナ市は人口約160万人のスペイン第2の都市で、同市だけで10の世界遺産を有している。その中でも市のシンボルと言えるのが、1882年の着工から134年を経た現在でも工事中の「未完の聖堂」サグラダ・ファミリアである。

我々視察団は1月25日、当地を訪問し、同教会建築財団のマリイ・ゲレロ氏からの説明・意見交換の後、ガイド・通訳のカルロス氏、ムツダ氏の案内で建物内を視察した。

1. 未完なるが故の魅力について

サグラダ・ファミリアの建築は浄財で賄われ、完成まで数百年かかるとされていたが、公式発表では、設計者のアントニ・ガウディ没後100周年目となる2026年の完成を目指している。

建築資金については、市の助成は全く入っておらず、ドネイション、つまり、寄付のほか、年間約100億円の入場料収入で成り立っており、資金は潤沢である。案内人が「世界でただ一つ入場料をとっている工事現場」と言っていたが、工事中なるが故の魅力を生かしている点は、本市



(サグラダファミリア全景)

にとっても大いに参考になると感じた。

一方で、未完の魅力なるが故に、完成後に観光客が減少する心配はないか尋ねてみたが、特段の心配はしていないとのことであった。

ちなみに、私の知人が「いつかはバルセロナに行ってサグラダ・ファミリアの建築にボランティアで参加したい」と言っていたが、作業には相応の責任が伴うことから、ボランティアの受け入れはないそうである。

2. 認知度向上について

サグラダ・ファミリアの年間観光客は400万人とも言われ、8割が個人、2割が旅行会社経由である。1日の入場者数が1万5千人に制限されるほど、我々が訪問したときも諸外国からの多くの観光客で賑わい、世界的な人気の高さを実感した。



(担当者によるレクチャー)

これは、1992年のオリンピックで世界中がバルセロナを認知した影響が大きいとのもので、えひめ国体、ひいては2020年の東京オリンピック開催を契機とした本市の認知度向上の重要性を改めて感じた。

なお、入場券はWEBサイトからも販売しており、その方がお得だそうである。現金での販売は当日券のみであるが、購入のために行列ができると近隣の迷惑ともなるので、財団としてもオンラインでの購入を勧めていた。

3. 行政と建築財団との関係について

サグラダ・ファミリアの建築は全て自前であり、「サグラダ・ファミリア教会

建築財団」が一括して設計・施工を行っており、市はその運営に関与できない。歴史と伝統の上からも行政が教会に何かを言えるものではなく、ただ、教会に隣接する2区画は、市が整備を推進した。

また、大聖堂は曲線だけの大変ユニークな造りで、現在でも8本の巨塔が立ち並び、人々を圧倒する存在感を示している。にも関わらず、超法規的な対応はなく、法令に合致して建築している。スペインは地震がない国なので、そこが違う。最近では、3D技術の活用で設計能力は大きく向上しているとのことであった。



(建造物内を視察)

大聖堂周辺では、市のものでしきジャンパーを着た係員を見かけたが、観光客が滞留しないよう移動ルートの設定や誘導を行ったり、駐停車の規制などを実施していた。近隣住民の住環境への配慮が欠かせないようだ。

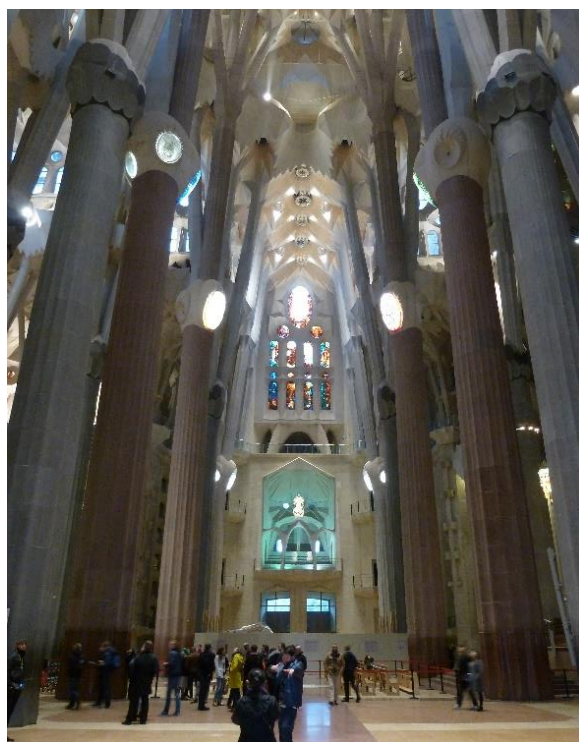
4. 結びに

サグラダ・ファミリアは何故、建てられたのか。ガイド・通訳のムツダ氏が問いかけてきた。教会は文字が読めない庶民のためのものであり、言い換えれば見るだけで分かる「一冊の石の聖書」と教えてくれた。

ガウディはこの教会に多くのステンドグラスを入れたかったそうである。これまでのゴシック建築は壁で支えるため、一定の強度を保つには多くのステンドグラスは入れられなかった。そこで彼は、柱で支えるカーテンウォール工法を採用し、現在でもこの工法は高層建築で広く採用されている。

厳密には教会の建設に着手したのはガウディではないが、彼は師が手がけた

事業を受け継ぎ、そして今、彼の意志を継ぐ者たちが9年後の完成を目指して師の意匠を実現しようとしている。そのことに、歴史の重みを感じるとともに、歴史的建造物を活用した街づくりという観点から有意義な視察であった。



(曲線美が美しい建造物の内部)